

ゴール型スポーツにおける防御局面での積極性に関する研究

～ハンドボール競技を例に～

森 下 純 弘

下 川 真 良（大阪体育大学）

松 木 優 也（武庫川女子大学）

山 本 忠 志（兵庫教育大学）

1. 緒言

一般に、スポーツは「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」「採点・測定型」「武道・対人的競技型」に分けられ、同じスポーツとはいえ、その競技を通して体得する資質の特徴は異なる。

日本における「ゴール型」の代表格を競技人口順に並べると、サッカー、バスケットボール、ハンドボール、ラグビーとなり、「ゴール型」は球技の中でも相手選手と（ときには激しい）身体接触が常態の中でチームプレーが行われる。中でも今日、ハンドボールは大きな発展をとげている。7人制の統一ルールの下に、オリンピックや世界選手権等の多くの国際大会も活発に行われ、サッカーやバスケットボールと並んでメジャーな球技の1つとなっている。

また、日本では2008年1月に行われた北京オリンピックアジア予選やり直し大会が東京で行われたことにより、ハンドボールは一躍注目・話題沸騰の競技となり、日本国内にセンセーショナルを巻き起こし「中東の笛」は流行語となった。

ハンドボールは攻防一体の展開が醍醐味であり、攻守混在型のパスゲームの範疇に属し、ゴール目標（ゴールキーパーが存在）型の特徴を有したスポーツである。なお、ラグビー、サッカーやバスケットボールとの大きな違いの1つは、ステップの制限と身体接触の許容範囲の問題であるが、これはボール操作の容易性と、身体操作の自由度によってその範囲が決められていると理解すべきであろう。

1970年代に7人制のハンドボールが世界に広く普及すると、ハンドボールの攻撃および防御戦術は、相対する防御および攻撃戦術との対立的な関係の中で合目的的に発達してきた

（會田、1994）。すなわち、自チームの長所を効果的に発揮し、短所を広く補償するように、また、対戦チームの長所をできるだけおさえ込み、短所を効果的に利用するように戦術が計画されて発達してきたのである（水上、1993）。1990年代以降に着目すると攻撃では、優れた体力や技術を持ち、即興力、想像力のあるプレーヤーが増加し、それを基にしたグループ戦術、チーム戦術が繰り広げられるように発達した。

それに対して防御では、バリエーション豊かなチーム戦術を持ち、それらをゲーム中に戦略的に行使することで攻撃に対抗してきた（シュペーテ、2003）。この時代の防御戦術の発達をリードしたのは、男子フランス代表チームである。1995年男子世界選手権大会では、従来の事前計画の枠組みにはまった組織的な防御ではなく、J. リシャールソンを中心にした臨機応変で柔軟な防御を武器に初優勝を収めた。防御の個人戦術に優れたプレーヤーを育てることを通して、様々な防御戦術を可能にさせ、チームの競技力を向上させていったのである（大西、2003）。このことは、個人戦術がチームおよびグループ戦術の単位として、ゲーム構想の実現やチームおよびグループの戦術的課題の達成に貢献すること（會田、2006）を考え合わせると、チームの競技力向上のために、個の育成を基盤とした、防御トレーニングの開発が重要であることを示している（船木ほか、2014）。

ハンドボールゲームには一般的に、「セットオフense」「セットディフェンス」「速攻」「速攻防御」の4つの大きな局面で構成され、これらの局面の連続体がハンドボールのゲームであると大西（1997）は述べている。また、セットオフenseは攻撃全体に占める割合が高く、その成功率を上げることがゲームの勝敗に大きく関係すると述べている。これらのことは、セットオフenseの局面の重要性を示している（大西、1998）。反対に、セットディフェンスにおいて、連続失点は、試合結果に影響を及ぼす要因の1つであると横山ほか（2014）は述べている。

攻撃がボールを保持し得点を取ることが目的ならば、防御はボールを奪い攻撃活動を継続させないために、攻撃活動の中断や遅延を狙うことが原則となる。そして、ボールを奪ったり、中断したりするためには、防御のバランスや深み、集中が必要である。相手の攻撃をしっかりとし、そこから自軍の攻撃に転じ、得点することで、相手より試合を有利に進めることができる。いくら自分のチームにオフense力があっても、全てのオフense機会に得点を決められるということはない。防御をおろそかにしては、勝てる試合も勝てなくなってしまうのである。

そこで本研究では、ハンドボールゲームにおけるセットディフェンスの局面での積極性を分類した上で、積極的防御の特徴を示し、今後の実践現場に有用な知見を導くことの考察を目的とした。

2. 研究方法

1) 研究対象

本研究における対象試合は、関西学生ハンドボールリーグ1部リーグに所属している大学2校（A大学，B大学）の2017年度秋季リーグ戦の試合とした。

両校を対象とした理由として、1つは西日本でも上位に位置し、毎年全国大会においても中堅以上に位置していること。もう1つは両校は基本的なディフェンスシステム（防御隊形）として、図1の様な半楕円状の実線である6メートルライン沿いに全員が並ぶ、6：0ディフェンス（以下、DF）と言う防御隊形を敷いてはいるが、異なる防御戦術を用いていることである。なお、対象試合は両校指導者が理想としたDFを行った各2試合とした。

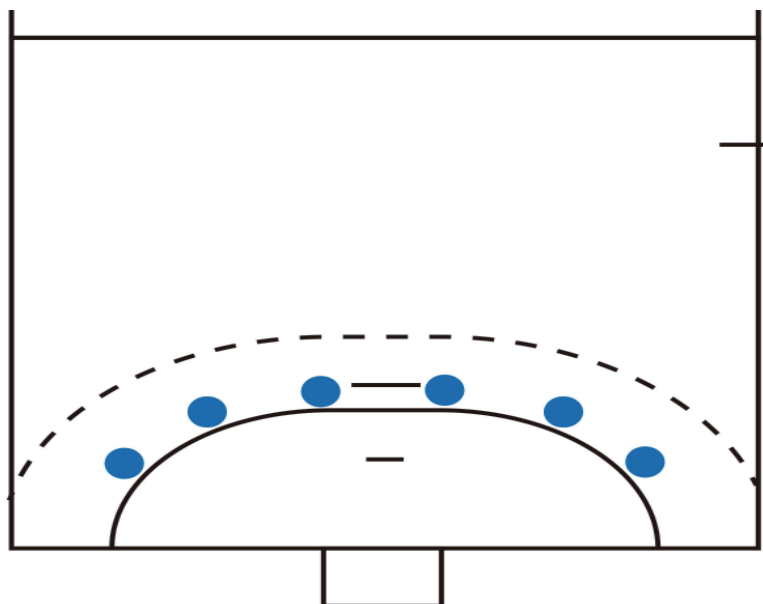


図1 6：0防御隊形

2) 積極的防御の捉え方

本研究では防御を「チームで共同して行う防御活動」、防御行動を「個人が行う防御活動」と定義した。ハンドボールゲームの防御は、ゴールエリア付近及びゴールエリアから離れた場所で攻撃者の動きに合わせた防御が展開されるため、防御における活動量が多くなる

のが特徴である。また積極的防御を「守る」＝「ボール奪取」のイメージで攻撃件を獲得する防御、すなわち「攻撃プレイヤーの行動を積極的に阻止しようとする防御」と捉え、その対義語「消極的防御」を「守る」＝「壁」のイメージでシュートを防ぐ防御と捉えた（會田、1994）。

3）研究手順

・観察資料の作成

本研究で対象とした全4試合の映像をコンピューターに取り込み、セットディフェンスの局面を抽出した。2次・3次速攻及びクイックリスタート時のディフェンスは省き、ボール及び複数プレイヤーが止まる、あるいはベンチもしくはプレイヤーから止まれの指示があったからの防御場面はセットDFとした。

また、各チームの指導者にDF評価に関する質問調査を行った。

・防御の積極性の評価

両校の専門的に指導歴を有する日本スポーツ協会公認上級コーチ資格保有指導者に対象場면을観察させながら、防御の積極性について5段階評価をさせ得点化させる。評価基準に関しては、松木ほか（2012）の研究を参考に、表1に示す。例えば、指導者が「この場面は非常に積極的に防御を行っている」と判断した場合は5と評価をさせる。いずれの分析項目においても分析者間の判定が一致しなかった場合は一致するまで観察協議し、それでも一致しなかった場合は分析の対象から除外した。なお、観察の際には研究者本人も同席した。

表1 防御の積極性に関する5段階評価の評価基準

評価	積極性
5 / 4	非常に積極的に防御を行っている / 積極的に防御を行っている
3	どちらでもない
2 / 1	消極的に防御を行っている / 非常に消極的に防御を行っている

・個人の防御行動の調査

個人の防御行動については、佐藤（2000）、松木ほか（2012）の研究を参考に、DFファール（防御側のファール）、ボディコンタクト、詰め、牽制、インターセプトの5項目（表3）を対象に、それぞれの出現回数を防御場面ごとに調査した。なお、DFファール、ボディコンタクト、詰めはボール保持者（ボールマン）に対して行った防御行動に限定し、牽制、インターセプトはボールマンがパスを出そうとしているプレーヤー（レシーバー）に対して行った防御行動に限定する。

表2 個人の防御行動の定義

防御行動	定義
DFファール	ボールマンに対してファールをする防御行動。段階罰レベルのファールは含まない。
ボディコンタクト	ボールマンに対して自ら積極的に身体接触を行う防御行動。ファールは伴わない。
詰め	ボールマンに対して積極的に詰める防御行動。身体接触は伴わない。
牽制	レシーバーに対して、ボールをスムーズにももらえないようにフェイントを行う防御行動。
インターセプト	レシーバーをマークしている防御プレーヤーによるパスカット。

3. 結果

1) 積極性の分類

積極性の分類を防御場面間の防御積極性総数値として、表3に示した。

数値だけで見ると、A大学は「どちらでもない」「積極的に防御を行っている」、B大学は「非常に積極的に防御を行っている」「積極的に防御を行っている」「どちらでもない」とになる。

両校で「非常に積極的に防御を行っている」は42場面、「積極的に防御を行っている」は59場面、「どちらでもない」は106場面であった。

表3 防御場面間の防御積極性総数値

	5	4	3	2	1	計
A大学	60	124	174	24	2	384
B大学	150	112	144	24	16	446

2) 積極性と防御行動との関係

各場面における総防御場面数値を表4に示した。A大学に関しては、インターセプトの出現回数に積極性に関する有意な関係は認められなかったと考えられるが、DFファール、ボディコンタクト、詰め、牽制の出現回数との間には有意な関係はあったと仮説する。

最も有意な関係が認められたと仮説するに考えられる防御行動は、詰めであった。この詰めの防御行動を行うことは、防御における活動量は多くなり、攻撃プレイヤーの行動を積極的に阻止しようとする防御へと繋がる。詰めの防御行動からボディコンタクトや牽制、インターセプトといったボール奪取という結果へと繋がることがわかる。

また、総防御場面数値と防御場面間の防御積極性総数値をもとに、積極性の平均指数を表5に示した。積極性の平均数値だけを見ると両校に差は現れなかった。

このことから、両校において各場面における防御場面での防御行動は異なるものの、およそ横並びの積極性を行っていることが考えられる。

ここまでの結果より、積極的防御には詰めの防御行動が大きな要因になると考えられる。

表4 総防御場面数値

	A大学	B大学	計
DFファール	16	12	38
ボディコンタクト	12	32	44
詰め	73	64	140
牽制	12	14	26
インターセプト	4	12	16
計	122	134	

表5 積極性の平均指数

	A大学	B大学
平均指数	3.32	3.32

3) チーム毎における防御の積極性及び特徴

以下に質問調査を行い、その結果をもとに、チーム毎の防御の積極性と特徴を記した。

・A大学

攻撃パスを回させる傾向にあり、シュート達成をされる場面は多いが、相手のミスを誘うケースも多い。そのためインターセプトが少ない。他の大学と比べ、積極性がやや感じられない場面はあるが、チーム戦術としての約束事だと指導者は言う。

DF専門のプレイヤーが切り替えのタイミング等で交代出来なかった場面をはじめ、巧みな司令塔やロングシューターがいる場合において、図2の様に3:2:1DFに防御隊形を変化させることにより、DFラインを上げ、攻撃のキッカケを早い段階で遮断する傾向にある。また、相手に退場者があり、自チームが数的優位になった場合にも、特別な事をするケースは少なく、数的同位時と同様の防御戦術にある。指導者は、ハンドボールの根本は1:1と2:2の局面をどのように「攻める」か「守る」か、DFはいかに広い1:1の状況を作り出さないこと、1:1を抜かれない技術を養うこと、また攻撃に2:1や3:2のプラスワンシチュエーションを作られないようにするかがポイントだと考えている。

また、指導者は就任4年目であり、まだ手探り状態ではあるものの、自身の経験や恩師の言葉を元に、相手に対する方向付けやポストがいる時の守り方(2:2、4:4)を中心に、声の掛け合い、駆け引き、場面によって対応が変わることの説明を徹底して練習を行ってきた。

これらのことより、流動的な部分・相手の流れを寸断する部分がまだ引き出せていないが、厚みのある防御は出来てきた。チームのDFの核は作らないといけないが選手の能力を見抜いてどのようなDFシステムを作るのか、私自身、3枚目(真中2名)のDFシステムの確立がまだ不十分である。恩師から学びながら自分自身のシステムの構築が必要であると指導者は言う。

・B大学

ボディコンタクトが多く、詰めを予測的に行い、インターセプトに繋げるケースがある。ボールマンだけでなく、レシーバーに対しても個々人が積極的に防御に行く傾向が見られる。指導者曰く、個の強み(ボディコンタクト・運動量・切り替えの早さ・球際の強さ)を全面に押し出し、相手の攻撃意図を摘みながら「ボールを奪う」ことに主眼を置いたDFである。このことから、ボールの動きに対して、ボールマン及びレシーバーに対して、図3のように柔軟に防御隊形を自在に変化させていた。パーツ練習(2:2、3:3、4:4)や総合練習(6:6、ゲーム)を通して、指導者自身の理想から不十分なポイントを抽出してトレーニング

グするようにしており、DFはOFより個の伸びしろは大きい局面であり、そもそもDFとは「失点せずしてボールを奪う」ということが目的であるため、ハンドボールゲームの主たる戦場はフロントコートだと考え、フロントコートで攻撃活動を行うために強いDFを構築する必要があると指導者は言う。

また、指導者は裏のスペースというリスクを最小限に抑えながら、組織的にプレスをかけ、機動力を使ったDFを心がけているとのことは図4に現れている。それは、ボールマンに対し、ボディコンタクトを行った後、ボールの流れに対し、予測的に自ポジションと反対側までフォローに行くといった行為は、そのひとつであろうと言える。



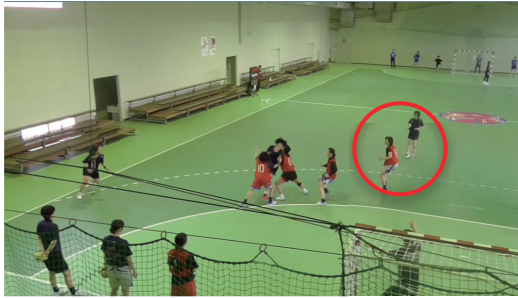
図2 A大学の防御専門プレイヤーに交代出来なかった時の防御隊形



図3 B大学によく見られた防御戦術



ボールマンに対して、防御活動を行なった。



後、自エリアと反対側までフォローに行く。

図4 B大学のボディコンタクト後の要フォロー移動の幅

4) 積極的防御の特徴について

本研究において、仮説した防御の積極性と個人の防御行動との関係において検討した結果、防御の積極性が高ければ、ボディコンタクト、詰め、牽制は多く出現し、その中でも詰めが圧倒的に多く現れることが明らかになった。この結果から、積極的防御はボールマンに対する防御行動やレシーバーに対する詰め、牽制が多く現れる防御と考える。

積極的防御は「攻撃プレイヤーの行動を積極的に阻止しようとする防御」と捉えたことにより、ボールマンだけでなく、レシーバーに対しても個々人が積極的に防御行動をとる防御だと考えられる。このことは、ボールマンやレシーバーに対する防御行動が増えると、攻撃のミス誘発することにより、防御側との距離が近い状況では、攻撃側のミスが高くなるということになる。また、詰め防御行動を行うことは、防御における活動量は多くなるが、攻撃プレイヤーの行動を積極的に阻止しようとする防御へと繋がる。詰め防御行動からボディコンタクトや牽制を行うことにより、プレッシャーを強める局面を全員が共有し、インターセプトといったボール奪取に繋がれば、チームの積極的防御の構築にも繋がるのではないかと考えられる。

4. 考察

局面によって、チームごとのバラツキはあるものの、おおよそ指導者の考えるディフェンスの概念や狙い、戦術通りと言える。

しかしながら、6:0、5:1、3:2:1DF等、いろいろなシステム（隊形）があり、それが微妙な違いでさらに細分化されるが、数字はあくまで目安である。自チームの現状をしっかりと踏まえたうえで、どのような形で守ることが一番良いのかを考えることが目的である。システムは手段に過ぎないということを忘れてはならない。

攻撃側のミスを生発させる、単発的なシュートへと導くような有効な防御を行うためには、個々の積極的防御行動のみではなく、それらを共同プレー、すなわちグループ戦術やチーム戦術の中で効果的に行っていくなくてはならないと考えられる。

また、全てのチームにおいて、「詰め」の項目に高い数値が見られた。詰め動作は、攻撃者のプレーしやすい間合いよりも接近することで、攻撃活動を制限して守備範囲に置くうえで重要なプレーである。

5. 総括及び今後の課題と展望

本研究において、防御の積極性と個人の防御行動との関係において検討した結果、防御の積極性が高ければ、ボディコンタクト、詰め、牽制は多く出現し、その中でも詰めが圧倒的に多く現れることが明らかになった。この結果から、積極的防御はボールマンに対する防御行動やレシーバーに対する詰め、牽制が多く現れる防御と考える。積極的防御は「攻撃プレイヤーの行動を積極的に阻止しようとする防御」と捉えたことにより、ボールマンだけでなく、レシーバーに対しても個々人が積極的に防御行動をとる防御だと考えられる。このことは、ボールマンやレシーバーに対する防御行動が増えると、攻撃のミスを生発することにより、防御側との距離が近い状況では、攻撃側のミスが高くなるということになる。攻撃側のミスを生発させる、単発的なシュートへと導くような有効な防御を行うためには、個々の積極的防御行動のみではなく、それらを共同プレー、すなわちグループ戦術やチーム戦術の中で効果的に行っていくなくてはならないと考えられる。

両チームにおいて、「詰め」の項目に高い数値が見られたが、この詰め動作は、攻撃者のプレーしやすい間合いよりも接近することで、攻撃活動を制限して守備範囲に置くうえで重要なプレーである。

また、本研究において、セットDFを対象としたが、選手の退場時による数的有利時及び数的不利時は考慮しなかった。数的同位時のみを抽出すればデータ数値は変わっていたのかもしれない、DFファールとボディコンタクトは紙一重であることから、結果がDFファールになることもあるが、選手が何を意図してそれらの行動に出たのか、選手から聞き出す事が出来ていたら、このデータ数値も変わっていただろう。対象試合数に限りがあったため、今後はより多い対象試合数を統計研究し、より正確性の高いデータとしたい。

同時に、個人の防御行動における防御積極性総数値を示すことにより、防御の積極性と個人の防御行動との関連において、積極的防御を評価する指標になりうるのではないかと考えられる。

また、本研究において、両チームによるゲームはランダムに抽出した。対象チーム1つに対してランダムに抽出するのではなく、同一対戦相手もしくは全チームを対象に抽出すれば、より信用性の高いデータになるかもしれない。本来であれば研究者本人のチームを対象に研究を行えば良いのだが、現在研究者本人はチームを指導していないことも課題要因のひとつになるのかもしれない。

松木ほか（2016）が述べているように、ハンドボールにおいて、コーチング活動、特に戦術指導に関する具体事例を、コーチの思考過程も含め、詳細に記述した報告はほとんどないが、コーチング実践活動を事例として発信していくことは、スポーツコーチングの更なる発展に必要不可欠であると考ええる。

【参考及び引用文献】

會田宏（1994）「ボールゲームにおける戦術の発達に関する研究」スポーツ運動学研究7：25-32

會田宏（2006）「個人戦術」（社）日本体育学会監，最新スポーツ科学事典 平凡社：179

シュペーテ：池田修訳（2003）「2001年フランス世界選手権大会の傾向」笹倉清則監，

Tactics of Handball in The World 文伸：405-415

- 大西武三（1997）「ハンドボールのゲームにおける局面の構成について」筑波大学体育科学系紀要20：95-103
- 大西武三（1998）「ハンドボールにおける世界のトップレベルのチームの戦術についてーセットオフenseの戦術ー」筑波大学体育科学系紀要21：95-103
- 大西武三（2003）「フランスの防御システムについて」笹倉清則監，Tactics of Handball in The World 文伸：254-257
- 財団法人日本ハンドボール協会編（1992）「地域・競技力 向上指導者C級用ハンドボール指導教本」大修館書店
- 佐藤靖（2000）「ハンドボールゲームの戦術の体系化について」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要22：41-60
- スポーツイベント・ハンドボール編集部編（2014）「ハンドボールスキルアップシリーズ 目からウロコのDF戦術」グローバル教育出版
- 田島聖子，三輪一義（2013）「ハンドボール競技における積極的防御活動を養成する導入プログラムの開発とその効果の検証：児童期の選手を対象とした指導実践を手かがりに」ハンドボールリサーチ2：39-47
- 船木浩斗，會田宏（2014）「ハンドボール競技のセットディフェンスにおける1対1のプレー方法に関する研究」体育学研究59：329-343
- 松木優也，會田宏（2012）「ハンドボールにおける積極的及び予測的防御の特徴」ハンドボールリサーチ1：1-7
- 松木優也，會田宏（2016）「ハンドボール競技における防御および速攻の戦術指導に関する事例報告」コーチング学研究29（2）：209-220
- 水上一（1993）「球技の戦術ーハンドボール競技を例としてー」スポーツ運動学研究6：99-103
- 横山克人，栗山雅倫，田村修治（2014）「ハンドボール競技における連続失点が勝敗に及ぼす影響」ハンドボールリサーチ3：17-22